

日本言語政策学会 第 21 回研究大会 発表賞（一般研究発表部門、ポスター発表部門）の授賞について

第 21 回研究大会の口頭発表およびポスター発表を審査した結果を受け、このほど学会賞選考委員会で慎重に審議し受賞候補者を選出した後、理事会の承認など所定の手続きを完了し学会賞である発表賞の受賞者を決定いたしました。

今回の受賞者は、発表賞（ポスター発表部門）1 名となりました。

以下に審査員からの講評と合わせて発表いたします。

発表賞（口頭発表部門）

該当者なし。

発表賞（ポスター発表部門）

受賞者：櫻間 瑞稀（筑波大学大学院人文社会科学研究科博士後期課程・日本学術振興会特別研究員 DC1）

発表タイトル： ディアスポラにおける母語の学習とその意義
—カザフスタン共和国在住タタール人の事例から—

講 評：

櫻間氏のポスター発表は、中央アジアのカザフスタン共和国に居住するマイノリティー民族であるタタール人の言語使用の実態と言語選択の動機について、民族語であるタタール語の継承と学習の観点から実証的かつ理論的に論じたものであった。基幹民族語である国家語のカザフ語とソ連時代の共通語であるロシア語の社会力学的関係の変化という従来の視点からではなく、二つの大言語の狭間に存在するマイノリティー民族語の視点からカザフスタンの言語使用の動態過程にアプローチしている点に本研究の新規性がある。特に、10 代から 70 代まで満遍なく抽出したタタール人被験者に対する聞き取り調査の分析結果から、各世代とも家庭内言語として少なくとも 4 割以上がタタール語を使用していること、また世代が下るにしたがって逆にタタール語の使用率が高まっていることなどを明らかにした点は、ソ連時代に（タタールスタン以外の）タタール人の間でロシア語化が進み、タタール語の運用能力が著しく低下した（あるいは完全に失われた）という通説を覆すもので、ソ連時代を通じてカザフスタンのタタール人コミュニティではタタール語の世代間の継承がなされていたこと、またソ連崩壊後に若い世代を中心にタタール語の「再」学習が活発化していることを示唆しており、学術的に強いインパクトを持っている。研究の手続きも手堅く、結論に説得力があった。さらに、発表内容をより詳しく解説したレジュメにアクセスできる URL と QR コードをポスターに表示したり、色覚バリアフリーに配慮した配色を心がけるなど、聴き手に対する様々な工夫が施されていた。発表時の説明態度と研究内容を口頭で表現する力が優れ、質疑応答では丁寧にかつ論理的に自身の考えを述べていた。

（2020 年 2 月 26 日 JALP 学会賞選考委員会）